

# 水族館を核としたまちづくりに関する研究

—宇多津町 四国水族館でのケース—

楠 見 寿一郎

## 第1章 はじめに

### 1-1 研究の背景

宇多津町は香川県のほぼ中央に位置し、面積8.1km<sup>2</sup>、人口1万9047人（2016年10月）のコンパクトシティである。東は坂出市、西は丸亀に隣接し、北部に市街地、南部に田園地帯が広がり、これを取り囲むように山々が位置している。1988年の瀬戸大橋の開通により、JR瀬戸大橋線や瀬戸中央自動車道が開通し、本州と四国を結ぶ広域交通の要衝となった。四国の玄関口として商業や観光施設が立ち並び、市街化が進むなど社会条件にも恵まれ、経済発展と人口増加につながっている。2007年10月の人口は1万8000人であり、2040年まで人口は増え続ける（宇多津町、2015）。

2009年「宇多津に新水族館」（日本経済新聞、2009）との報道で新水族館構想が発表されたが、実現には至らなかった。しかし「宇多津町に水族館を誘致する会」<sup>1</sup>が二度にわたる署名活動（2006年2万5千人、2011年7500人）を実施した経緯があり町民の水族館建設への期待は大きいといえる。

市町村の域活性化の切り札である「地域資源」の活用について、中小企業白書によると1位は農水産品（36.9%）2位は観光資源（34.9%）となっている（「自治体の中小企業支援の実態に関する調査（三菱UFJリサーチ&コンサルティング株、2013）」。市町村は「農水産品」や「観光資源」を地域活性化の

切り札として認識している割合が高いことが分かる。宇多津町においても「農水産品」や「観光資源」の活用が地域活性化のためには必要であることは明白である。しかし、宇多津町の第一次産業従事者は102人（農林業79人漁業27人）であり、県下でも産業構造に占める第一次産業の割合は低く香川県における農業生産額占有率は0.1%である（農林水産省、2015）。

一方、特産品開発のため、町と地域の農家が協力し、1.2ヘクタールで古代米を栽培している。連携する地元醸造会社では、古代米の色彩を生かしたピンク色で低アルコールの酒「リセノワール」を開発し、結婚式場などで好評を博している。また、温暖で雨が少なく、日照時間が長いという瀬戸内式気候を利用して、江戸時代中期から1972年の塩田廃止まで、全国屈指の塩のまちであった。従って入浜式の塩づくり体験施設及び特産の塩を使った町産品（希少糖入り塩キャラメル・塩アメ・入浜式の塩・入浜のにがり等）も販売されているが特産品とまでは売れていないのが現状である。

従って宇多津町の地域活性化には、「農水産品」よりも「観光資源」が有効である。では、宇多津町の「観光資源」を考える場合、町の歴史から見て地理的な面で二分して考える必要がある。一つはかつての街の中心であった「古街」と呼ばれる地域で古い建物や寺社などが残り、和風の趣のある街で町役場の南側にある旧町の一部が「古街」と呼ばれ、四国八十八ヶ所霊場の第78番札所「郷照寺」<sup>くら やかたさん かくてい</sup>、三角屋根の洋館が特徴的な「倉の館三角邸」<sup>うぶしな</sup>、遷座1200年の歴史をもつ「宇夫階神社」など、歴史や文化を感じさせる建物が数多く建ち並んでいる。3月にはおひなさんのイベントも開催されている。

平成30年11月30日受理  
連絡先 〒769-0201 香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁10番地  
香川短期大学  
TEL 0877(49)8030 FAX 0877(49)5252  
Email kusumi@kjc.ac.jp

新都市と呼ばれる町北部（旧塩田跡地）地域には瀬戸内海が一望できるゴールドタワーや、結婚式場、カフェなどがひしめき「恋人の聖地」にも認定されている若い雰囲気の地域である（恋人の聖地プロジェクト・2006年4月1日より、全国の観光地域の中からプロポーズにふさわしいロマンティックなスポットを「恋人の聖地」として選定し、地域の新たな魅力づくりと情報発信を図るとともに、地域間の連携による地域活性化を図っている。NPO法人地域活性化支援センター）。

それぞれの観光資源が存在しているが「核」となりうる資源が存在していないというのが宇多津町の現状である。

## 1-2 宇多津町について

1973年以降、四国の観光は低迷が続いていたが瀬戸大橋の開通により橋自体が超A級の観光資源となることや、瀬戸大橋架橋記念博覧会（1988/3～10 350万人）の開催等もあり、瀬戸大橋観光ブームとも言える状況となった。四国の主要観光地の入込客は前年比で栗林公園258%、琴平191%、道後温泉189%と大幅に増えている（運輸白書、1988）。

### 1-2-1 瀬戸大橋開通が県内観光にもたらしたインパクト

1988年の県外入り込み客数は四国全体で前年比40.8%増の2832万3000人、中でも香川県は前年の二倍強の1035万1000人。特に架橋地に近い宇多津・坂出・丸亀・琴平などの中讃地域では架橋前の3.4倍に急増する大橋ブームに沸き返った。しかしながら、空前の瀬戸大橋ブームも県民が期待していたほど長くは続かず翌1989年の入り込み客は前年比20%減の826万5000人に落ち、以後、1991年を除いて毎年減少した。四国全体では10年間でほぼ架橋以前の水準に逆戻りしているのが現状である。この原因は1993年の冷夏長雨、1994年の渇水、1995の阪神淡路大震災などがマイナス要因として響いたことが考えられる（続宇多津町誌うたづ、2010）。

### 1-2-2 宇多津町の商業について

瀬戸大橋開通後、新宇多津都市に1993年、宇多津ビブレが開店した。新宇多津都市の拠点商業施設と

して、より若者向けであり、物販はもちろん新たに飲食ゾーン、ホテル、ファンタジーゾーン、シアター（ワーナーマイカルシネマ宇多津）、カラオケ、ゲームセンター、温泉、スパ、スポーツジムなどを配置し香川県中讃随一の郊外型複合専門百貨店として大いに注目される施設となった。

しかし、同じイオングループのイオンモール綾川が系列のシネマコンプレックスを併設して開業するなど自社競合を含めた近隣の商業施設との競争の影響で集客力が低下し2007年頃から売上が低迷し最盛期の1998年2月期の半分まで落ち込んだ。バブル景気の終焉やDCブランドブームが終わりマイカル経営破綻により2014年2月に閉店した（シネマ施設は営業しないが残した・四国新聞（四国新聞社）、（2014年3月17日）2018年8月31日閲覧）。

瀬戸大橋ブーム後の新宇多津都市における商業展開では美しい景観にも恵まれて、ブライダル産業集積地へと変化している。大型結婚式場である「チャペル・セントカテリーナ」「シェエルメール」「セントバイヒルズ宇多津」等が営業しており新たな可能性を模索している。ただ2000年あたりから、ゆめタウン高松（1998）、イオンモール高松（2007）、綾川イオンモール・ゆめタウン丸亀（2008）の開店が相次ぎ宇多津の拠点商業施設としての機能が相対的に低下してきたことは事実である（資料1）。

### 1-2-3 ゴールドタワー衰退の背景

ゴールドタワー自体がバブルの産物であった。タワー以外にも世界のトイレ（純金のトイレ設置など）やタレントショップなども一時的ブームに終わり、バブル崩壊と同時に魅力がなくなった。経済の低迷により、「物の豊かさ」より「心の豊かさ」を求めるようになった。さぬきうどんブームもあり香川県への観光客のニーズも大きく変化した。また、当時の観光地自体が点であり周辺観光地との周遊ルートの開発などがなかったことも一因と考えられる。タワーは2001年に一旦、閉鎖された。

その後、2004年プレイパークゴールドタワー再開、カラオケやボーリング場、各種遊具等の集積施設を併設した（入場が定額料金1200円）が周辺には安価なカラオケボックスやスポーツセンターまた、ラウンド・ワン（高松）等がありビブレ閉店によっ

てますます魅力のないエリアとなってしまった。

しかし、2015年秋に旧ビブレ跡地にイオンタウン宇多津がオープンし、多くのカフェが営業し、恋人の聖地、短期大学や専門学校の存在、若い夫婦が多く明るい街ということで街の活気は取り戻しつつあるのも現状である。

### 1-3 研究の目的と方法

宇多津町に2020年3月に完成予定の「四国水族館」を新しい地域資源と捉え、水族館を核とした持続的なまちづくりを実現するために、地域住民が水族館とどのように協働し、どのような活動を実践していくことが必要であるのかを明らかにすることを目的とする。四国水族館は四国水族館開発（流石学社長）が完全民営で行う事業であるがその管理運営組織が神戸市立須磨水族園管理運営組織代表企業の(株)ウエスコ（経営コンサルタント会社：岡山市）に決定している。本研究は神戸市立須磨水族園が地域に果たしている役割や地域づくりに寄与している内容から、2020年3月に完成する水族館がまちづくりの「核」となりうるには地域住民がどのような実践や協働を実践していくことが重要であるかということ进行を明らかにする。

方法は、神戸市立須磨水族園にかかわる団体等における取り組みへのヒアリング調査及び宇多津町および周辺住民に対して町のイベント開催時におけるアンケート調査を分析し、自らの団体の活動を踏まえて考察及び提言をする。

## 第2章 先行研究と先行事例

### 2-1 先行研究

山浦（2008）は、金沢21世紀美術館の集客における成功要因について、開館前から6年間に渡って開催してきたプレイベントをあげ、学校、繁華街等の各所で20回近くも開催し、市民と難解なイメージの強い現代アートとの心理的な距離を縮めることに成功したためであると述べている。

水族館の意義と役割について土居（2013）が四つの公的機能（レクリエーション・自然保護・教育・研究）を果たすための存在意義を説き、社会的意義として自然への共感を呼び起こす場としての意義

と、地域の核としての意義及び地域的な存在であると述べている。

博物館が地域づくりにどのような関わりを持ちうるかについては向井田・広田ほか（2005）が活動団体の立ち上げや育成を図り、事務局機能を担当し活動を支援すること、企画や運営の一部を担うことなどほぼ全てに活動に可能性があるが人手不足を補うためには地域住民との連携が不可欠であり、博物館は地域づくりへの関わりを深めることができると述べている。

また、文化施設が地域の課題の解決に寄与しうるかについて、鳥羽・織田（2007）は公立博物館が地域の文化・産業・市民といった要素をまちづくりの展開場面で有機的に関連づけることが市民の学習意欲を高め、活動機会を広げ、さらには文化に関するまちづくりへの参画機会を創出するという点で、地域課題の解決に貢献しうるということが明らかになったと述べている。

先行研究では、水族館が地域の核として地域課題の解決に貢献しうることから活動団体の立ち上げや育成の必要性が明らかになっている。なお、まちづくりの定義は山崎（2000）が住民生活における「土地の共同」利用とその上に成り立つ共同生活条件の整備を目的として、生活の必要性に基づいて地域問題を解決し、目指すべき地域像を達成していく取り組みであると述べている。田村（1987）は「まちづくり」とは「一定の地域に住む人々が、自分たちの生活を支え、便利に、より人間らしく生活していくために共同の場を如何につくるかということである」と述べている。

全国的にも水族館等が出来た結果、まちづくりの要素として機能したという調査研究はあるが、水族館等の施設の準備段階からの取り組みの先行研究事例は少ない。

### 2-2 先行事例

南知多ビーチランドは日本福祉大学と2009年3月に体験型水族館・おもちゃ遊園地の「南知多ビーチランド・おもちゃ王国」と交流協定を締結し、子どもの発達に関する教育・研究の充実を図るための取り組みを行っている（日本福祉大学、2017）。愛知県の日間賀島およびドルフィンビーチは水産業を核

として地域ブランドを構築し、食・観光産業を含めた一つの海業クラスターが実現した“タコとフグによるフードツーリズム”。背景として、漁業と観光の連携体制とリーダーシップの存在、域内利益循環システムの形成、地域内での共生の精神や地域の思いがある。漁協・観光協会から商店・漁家までの広範囲において、域内で利益が平等に配分されるシステムが構築された。名鉄との企画旅行商品の造成と近隣での宣伝が功を奏した（安田，2012）。

地域や学校等と連携している事例として新江ノ島水族館は「クラゲ」プログラムクラゲ展示の先駆けとして住民参加型の相模湾クラゲ調査採集を実施、「えのすいECO」生物に関する生態学（エコロジー）と環境を考える活動（エコアクション）の両面から独自に「えのすいECO」に取り組んでいる。「えのすいクラゲ毎月第三日曜日「えのすいECOでデー」を開催しごみ減量のためのフリーマーケット、ビーチクリーン活動、漂着物の利用、作品づくりなどのプログラムを実施している。相模湾に隣接し湘南に位置する水族館として住民と一緒に楽しくできることを考えコツコツと実行している（新江ノ島水族館，2017）。

山形県鶴岡市の加茂水族館は、建物の老朽化による改築工事のため2013年末に閉館し、クラゲドリーム館が2014年6月にリニューアルオープンした。なお、加茂水族館は2012年4月にクラゲ展示種数でギネスに認定されている。山形県と鶴岡市は加茂水族館を起点とした地域活性化と訪日旅行者の取り組みを図ろうと試みており、地域の旅館との連携や住民参加の観光インフラへの投資に取り組んでいる。地域の旅館との連携では、クラゲの知識を身につけた人が持てる「クラゲマイスター（初級、中級、上級）」（山形大学，2017）を地元温泉旅館の若主人や女将などが取得し、自分の宿の宿泊客に水族館の裏側を案内する「クラゲのバックヤードツアー」を行うことを計画している。観光インフラへの投資では、今回のリニューアルにかかる約30億円の改築費の一部を住民参加型の公募債「加茂水族館クラゲドリーム債」発行で調達している。また、動物の引越しの際には地域住民にボランティアを募った。ショップ・レストランにおいてエチゼンクラゲ定食・クラゲラーメン・クラゲジュース・などのオリジナ

ルメニューの販売も行っている。

地域との連携活動は教育活動としてクラゲ教室や勉強会の開催や地元の小学校にクラゲを寄贈し、クラゲの飼育を体験させている。また、地元の水産高校や漁師からの魚類の提供もある。加茂水族館における取り組みは水族館の存続自体が地域貢献となっているおり、地元の観光地として大きく貢献している（児玉，2016）。

水族館との連携による視覚特別支援学校での授業実践例として筑波大学附属視覚特別支援学校において、葛西臨海水族園は中学部でのマグロを用いた授業（2003年）と、小学部でのウナギを用いた授業（2013年）を、美ら海水族館は、大阪府立視覚支援学校はじめ関西5校の視覚特別支援学校と筑波大学附属視覚特別支援学校においてサメの観察を中心にした授業（2011年）を行っている（海洋政策研究所，2015）。

### 第3章 宇多津町における水族館とそれに関わる取り組みについて

#### 3-1 水族館について

日本には約6,000館（「博物館法」に規定するもの以外を含む）の博物館がある。歴史資料館や美術館、科学館、動物園、水族館など、取り扱う対象物や形態は様々である。水族館の法的位置づけは、「博物館法」（昭和26年12月1日法律第285号）の（定義）第2条に、この法律において「博物館」とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む。以下同じ。）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関である」と記している。現在、公益法人日本動物園水族館協会に加盟している水族館数は60施設である（JAZA，2017）。

安田（2008）は博物館との最も大きな違いは、博物館は過去の遺産や美術品を収集・展示・保存・研究が目的であるのに対し、水族館は現在、生きている水生生物を収集・展示・飼育・種の保存・研究することが目的であり飼育という他の博物館にはない

活動の占める割合が大きい。ただし、飼育だけが独立しているのではなく、すべての活動が連動して行われると述べている。

水族館について、土居（2015）は「各種の水生生物を集め飼育して一般の観覧に供する施設」、師岡（1987）は「水に住む魚類、水生生物を系統的に収集、飼育して展示公開する博物館施設である。教育、レクリエーションのための施設で、あわせて動物学の実験、研究を行う施設」、辻原（2007）は「各種の水生生物を収集・飼育し、その展示を社会教育やレクリエーションに役立てる施設」と定義している。

### 3-2 四国水族館について

#### 3-2-1 設計コンセプト

「四国水族館ならではの魅力」の創出を目指し、次世代を感じる新たな取り組み、チャレンジを反映させるため、「つながる水族館」「すべてを見せてしまう水族館」「変幻自在な水族館」の3点をコンセプトとしている。「つながる水族館」・人とつながる・生物を介してつながる・地域とつながる・文化とつながる・革新技術でつながる「すべてを見せてしまう水族館」・自分の意思で見せる・表と裏を両方見せる・環境技術を見せる・スポンサーを見せる・四国を見せる（魅せる）「変幻自在な水族館」・昼と夜で展示が変わる・来館するたびに展示が変わる・スケルトン建築水族館・時代とともに建物が変わることが特徴である。

#### 3-2-2 基本設計の概要

四国水族館のメイン展示テーマは「四国水景」。太平洋と瀬戸内海に囲まれ、豊かな川に恵まれた四国の、美しく命あふれる水中世界を表現する。四国を10の大景にゾーニングし、その中の代表的な水景を約100の水槽で表現する。また、四国水景をより引き立たせ、かつ常に斬新な展示メッセージの発信のため、更新型の展示エリアを計画している。

四国水族館では、様々な四国の水景を通じて、生きものが暮らす生息環境に加え、地域文化を感じる空間演出やガイダンス展示により、四国水族館を起点とした四国各地とのつながりを創出する。また、四国のみならず全国に誇る最新水族館として、

IoT、AIをはじめとする革新技術を積極的に導入し、展示においても、全体が見渡せる手法（自分の意思で見たいものを選択できるフリー動線）を取り入れ、四国水景の魅力を、観客、水槽、飼育員が同一シーンで見える仕組みを設計に反映している。

また、昼と夜で見え方が変わる環境演出や、ダイナミックな展示空間の変更を可能にするスケルトン・インフィル（建築構造と水槽の分離）を採用している。こうした技術の導入により拡張性に優れた構造となり、来館するたびに、また時代の流れとともに変化する「変幻自在な水族館」が実現できる。

四国水族館は2020年3月のオープンを予定。総展示水量2,200t級、展示空間面積10,000m<sup>2</sup>級で四国最大級の水族館になる。初年度の来場者数は当初計画通り120万人を見込み、開業に伴う経済波及効果は年平均で83億円規模を想定、地域経済に大きな効果が期待されている。

四国を代表する水族館として、地域とともに発展、成長し続ける次世代水族館を目指し、2020年のオープンに向けて引き続き取り組んでいる。

表1 四国水族館施設概要

【出所】 四国水族館開発HP「建設概要」より

【施設概要】 建設予定地	香川県綾歌郡宇多津町 うたづ臨海公園内
敷地面積	8,516m <sup>2</sup>
建設面積	4,521m <sup>2</sup>
延床面積	7,184m <sup>2</sup>
公開領域面積	6,451m <sup>2</sup>
構成	地上2階
構造	鉄筋造及びRC造
展示水量	約2,233t
常設展示数	水槽数78基
展示生物種	約400種
展示生物点数	約14,000点
集客予測	初年度120万人、ボトム70万人

#### 3-2-3 今後の予定

2017年（平成29年）9月末に基本設計は完了し、2017年（平成29年）10月には実施設計を着手している。2018年（平成30年）6月に建築工事が着工し、2020年（平成32年）3月に開業予定である。基本設

計者は株式会社大建設で担当者は広島事務所設計室課長今村氏及び大成建設株式会社エンジニアリング本部水族館プロジェクト室長加藤氏である（四国水族館開発，2017）。

四国水族館の強みは宇多津町は四国の玄関口でありさぬき浜街道のすぐ横，瀬戸中央道坂出北インターから4.5km，JR宇多津駅から1kmと四国各地からのアクセスは抜群にいい。水族館は近年，集客力が高く成功モデルであり，四国には競合施設が無いことと，商圈の大きさが魅力である。四国の人口は京阪神と比べて少ないが，競合施設が無いというメリットがある。瀬戸内国際芸術祭や金比羅山，インバウンド等を視野に入れ瀬戸内海沿岸の観光施設と連携した観光ルートの構築が可能である四国水族館投資家向けプロモーションビデオ，2017）大成建設株式会社エンジニアリング本部水族館プロジェクト室長加藤尚行氏）。

### 3-3 団体の立ち上げと活動に実績

2015年（平成27年）度，四国水族館開発が地域住民参加型ワークショップ「水族館を核とした臨海公園周辺の活性化」が開催された（2016年2月・7月，四国水族館開発主催）。二回のワークショップでは約50人の関係者が集い，様々な意見が出されその内容を5分野に分類した。その分野は，水族館の展示やサービス，体験プログラムに関すること，臨海公園や周辺施設等と連携した観光・イベントに関すること，魅力ある飲食や物販に関すること，観光情報等の発信・周辺の観光地巡りに関すること，その他（環境保全活動，既存の行事・祭りとの連携等）である。その際，水族館プロデューサー中村元氏より住民主体で水族館やうたづ臨海公園周辺のまちづくりを考える部会の必要性の提案があり，著者自身が平成28年にそのミーティング部会を立ち上げる提案を行った。

その結果，2016年（平成28年）10月1日にうたづ臨海公園周辺のまちづくりを考えるミーティング部会「うたうみパラダイスサポーター海星」を発足させた。会員は約20名である。会員の構成は地域住民，イルカトレーナーを目指す専門学校生，須磨水族園で現地研修中の四国水族館開発社員，（株）ウエスコ，まちづくり課職員，高校生，地元企業関係者等

である。毎月一回の会合を行い，会の方向性も決定している。その方向性とは，恋人の聖地の魅力向上，水族館の関連性づくり，宇多津駅から水族館までの魅力ある動線づくり，地域に根付いた水族館づくり（地域との関わり，地域貢献），地域住民の気運を高める仕組みづくり，仕掛けづくり，早嶋さん，池上さんがイルカトレーナーになるまでのドキュメンタリーづくり，水族館に来た観光客の回遊性を高める仕組みづくり，仕掛けづくり（観光地巡り），本ミーティング部会の組織づくり，等の方向性である。

その後，2017年（平成29年）4月には町のイベントである「歩天（ほこてん）UTAZU」へのブース出店を行いアンケート・海星キャラクター投票コーナー・塗り絵コーナー・オリジナル缶バッジ制作コーナー・ステージパフォーマンス【クイズ，粗品】・ヒトデ等のタッチプールコーナー・粗品の提供・（仮称）四国水族館事業紹介コーナー等で水族館のプロモーションを実施した。

アンケートには375名，オリジナル缶バッジには300名，塗り絵コーナーには121名，総計796名の参加があった。

また，11月4日・5日の町の秋の収穫祭イベント「うたづ秋の大収穫祭」（11月4・5日，宇多津町実施）へのブース出展を実施。実施内容は，水族館の認知度や期待度についてのアンケート実施，キャラクター名の投票，キャラクターの塗り絵，オリジナル缶バッジ作成・提供，粗品の提供，その他（前回投票結果等の報告等）である。共催イベントとして神戸市立須磨水族園によるタッチプール（エイ・サメ等），サンロクマル水族館（VRで須磨水族園大水槽内の360度映像を体験，須磨水族園オリジナル顔はめパネルで記念撮影，四国水族館のPR（映像・パネル等）でプロモーション活動を実施した。

二日間のイベントということもあり非常に多くの住民がブースに訪れた。タッチプールも好評であり，水族館と地域とのかかわりに関するアンケートは300枚限定で行い，海星キャラクターの塗り絵は537枚，海星キャラクターの名前については665枚回収があり，オリジナル缶バッジには1,000人の体験を実施し，総計で2,502名がブースに来場し大盛況のうちに終了した。住民のなまの声も聞くことがで



図1-2 「歩天UTAZU」ブースの様子（4月29日）

【出所】筆者撮影



図3-4 「うたづ秋の大収穫祭」(11月4・5日) ブースの様子

【出所】筆者撮影

きて、水族館への期待の大きさをメンバーが感じ取れるイベントとなった。塗り絵に関しては、イオンタウン宇多津に展示の協力を依頼し、11月18日から12月4日まで1階東出口に展示をして来客者に公開できた。

### 3-4 建設段階での取り組みについて

現在、水族館建設予定地（香川県綾歌郡宇多津町浜一番丁・うたづ臨海公園内）にはクスノキやヤマモモなどの常緑樹が約200本植えられており、建設に際しては伐採の必要があり2018年3月より樹木の伐採が開始する。伐採の主体は四国水族館開発である。しかし、自然保護や環境教育、また住民の感情

への配慮等から水族館建設の為の樹木に対する配慮が必要と考え、そのことに関して、筆者自身が、ウエスコに対して樹木の移植の実施と樹木の再利用の提案を行った。ウエスコは、町との話し合いを行い、一部は山林等に移植する方向性で伐採することを検討中である。また、樹木の再利用については地元の企業（讃岐化成株式会社 宇多津町浜一番丁西本祐三代表取締役）が四国内の間伐材加業務を行っており、再利用を提案したところ快諾をされ設計企業である大成建設と伐採木材再利用を進めていくこととなった。建設予定地の間伐材加工木材を水族館建設用材に使用することにより、水族館建設に関して環境や民意にも配慮した事業の推進が実行で



図 5-6 四国水族館建設予定地

【出所】筆者撮影（2017年12月16日11時03分）



図 7 四国水族館建設後のイメージ図

【出所】四国水族館開発HPより



図 8 四国水族館内イメージ図

【出所】四国水族館開発HP「水族館事業に係る基本設計の進捗のおしらせ」より

きると考える。

## 第4章 ヒアリング及びアンケート調査

### 4-1 神戸市立須磨水族園関係団体へのヒアリング

#### (1) ヒアリング調査

四国水族館の運営委託業者は神戸市立須磨水族園の運営委託業者と同じ(株)ウエスコ（経営コンサルタント会社：岡山市）（毎日新聞、2016）に決定している。また、神戸市立須磨水族園は開演60周年という長い歴史の中で、地域とともに地域に根ざした活動を行っている事例として須磨水族園の関係団体についてヒアリング調査を実施した<sup>2</sup>。

神戸市立須磨水族園の運営形態は公設民営（施設の設置は神戸市、運営は民間の指定管理業者(株)ウエスコ）である。規模は、延床面積 約14,500m<sup>2</sup> 飼育動物 580種 17,839点、年間来場者約120万人（2016年度実績）、職員 75名（平成29年4月時点）で営業している。持続可能な地域づくりに寄与する水族館として、「観光・経済」「自然環境」「福祉・教育」「地域コミュニティ」などの面で地域に貢献している（神戸市立須磨水族園、2017）。

ヒアリング対象は以下の通りである。

- ①スマスイボランティア（水族園住民ボランティア）・水族館住民ボランティア園内の活動を支援している。

- ②須磨オーシャンスタイル（S.O.S）・須磨海岸を中心に賑わいづくりのために設立された団体である。

- ③須磨水族園飼育部長・須磨オーシャンスタイル代表を務めている。

- ④須磨里海の会・アサリの再生を通じた環境活動を行っている。

- ⑤神戸西部地区観光施設協議会・神戸市の西部地区における主要な観光施設で構成した協議会である。

- ⑥(株)ウエスコ・須磨水族園の運営委託業者で周辺地域や多様な団体と連携を図りつつ、観光促進や環境保全活動など、より良いまちづくりに寄与している。

ヒアリング対象者は、地域活動において中心的な役割を果たしている活動団体の代表等である。ヒアリング調査内容は以下の通りである。活動の背景や継続性、問題点などを調査した。内容は基礎情報（内容・運営・参加状況等）、活動の動機、どのような満足感があるのか（新たな発見も含めて）、活動していく中での悩みや、問題点は何か、今後の抱負について、である。

### 4-2 ヒアリング結果

ヒアリング結果、判明したこと及び宇多津への応用をまとめると以下のようにまとめることができる。

表2 ヒアリング結果

【出所】筆者作成

須磨オーシャンスタイル事務局長 幸内氏
漁師であったが魚の価格低下、不漁、生活苦の状況を打破するために漁港を観光地とする取り組みを行い漁港市場を始め、中学校区で防災と観光のイベントを行い地域で活躍するメンバーを集めて組織化した。
須磨オーシャンスタイル代表 須磨水族園 飼育部長 大鹿氏
自治体と住民との間のハブ的な団体、水族館ができた後の町の構成を支える団体の必要性がある。自治体のイベントを共催できるような団体で地元のネットワークの構築が大切である。
スマスイボランティア 代表 萬井氏
団体21年目で約100名の登録者。さまざまなイベントを通して社会貢献できていることがやりがいになっている。何をしても水族館につながるという精神が大切である。常に市民目線で行っていくことが大切である。自分自身は水族園とボランティアとの調整役である。
(株)ウエスコ 須磨水族園経営企画室 浜本氏
神戸市立須磨水族園は持続可能な地域づくりに寄与する“まちづくりのプラットフォーム”であると思っている。周辺地域との連携により観光促進や環境保全活動などよりよいまちづくりに寄与している。（仮称）四国水族館もそのような役割を持たせたい、まさに「地方創生水族館」として機能させたい。

表3 ヒアリングより判明したこと

【出所】筆者作成

1	団体によるまちづくり活動の対象とするエリアは中学校区くらいが良い
2	団体のメンバーに水族館も加える
3	団体は水族館を助ける立場
4	水族館ができた後の町の構成を支える団体の必要性がある。自治体のイベントを海星と共催できるようになると良い
5	水族館の維持管理や周辺整備（動線）を行うことが良く、メンバーがあと3人（商工会・商工会青年部・地域ボランティア団体等）必要であり、象徴的なパフォーマンスをすることも大切である
6	環境保全活動の実施も視野に入れておくこと
7	ボランティア団体の立ち位置を水族館と話し合い、協働できるようにすることが重要である。

表4 ヒアリング結果を宇多津に応用

【出所】筆者作成

1	団体によるまちづくり活動エリアを宇多津町とする
2	団体のメンバーに四国水族館開発や(株)ウエスコが加わっている。
3	団体は水族館の維持管理や周辺整備（動線）を行うことを視野にいれて活動していく
4	団体の活動状況を宇多津町まちづくり課の藤村様に相談していく
5	プレイベントやプレバックヤードツアーの実施を行う
6	ウエスコの指導によりわれわれ海星のメンバー自体の勉強会を実施していく
7	(株)ウエスコと話し合いを進め、須磨水族園の反省点を活かしてを団体を形成していく

#### 4-3 宇多津町イベントでのアンケート調査

##### 4-3-1 アンケート調査の概要

宇多津町は毎年11月初旬に宇多津駅前から臨海公園（水族館建設予定地東側）までの道路を歩行者天国として“秋の大収穫祭”というイベントを行っている。日時は4日（土）5日（日）、主催は宇多津町、開催趣旨は中讃地域の農・水産物・各種物産販売及びその他各種団体による飲食物・商工品等のPR販売を行い地域の活性化が目的である。合同開催事業として11月4日（土）には中讃秋のびちびちとれたて市（主催／中讃海域漁業・漁村活性化協議会）が開催される。昨年は二日間で約32,000人が訪れた（宇多津町まちづくり課・藤村氏より聞き取り）。水族館のプロモーションには最適のイベントである。“海星”はブースを出展し、缶バッジ作りや、キャラクター投票、水族館に関するアンケートを菓子、また、須磨水族園からもヒトデやサメのタッチプール及び、須磨水族園の大水槽のVR体験も実施した。

アンケートは宇多津町秋の収穫祭イベント会場（香川短期大学学生駐車場）“海星”ブースで来場者

305名に対して実施し、300枚の回答を得た。

##### 4-3-2 アンケート結果

1. 回答者の属性は女性が214名、男性が84名、未記入が2名であった。

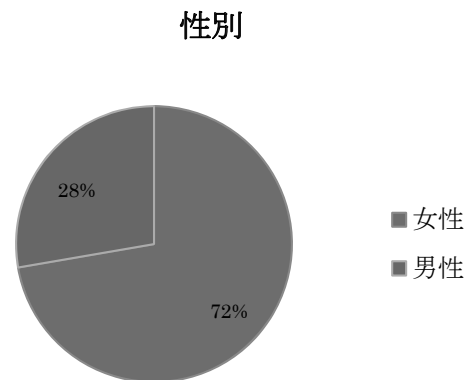


図9 回答者の性別

【出所】筆者作成

2. 回答者の年代年齢構成は、子どもの母親世代の30代40代で60%を超えていた。

表5 回答者の年代

【出所】筆者作成

10代	21名
20代	27名
30代	112名
40代	71名
50代	22名
60代	32名
70代以上	13名
未記入	2名

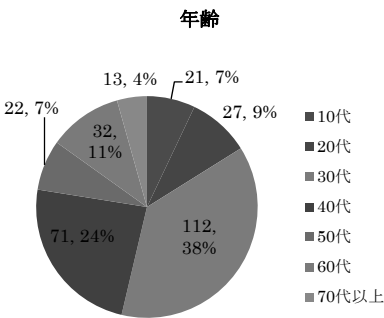


図10 回答者の年代

【出所】筆者作成

3. 回答者の住所は丸亀市95名、宇多津町73名で半数を超えていたが、高松市から回答が33名と多かった。

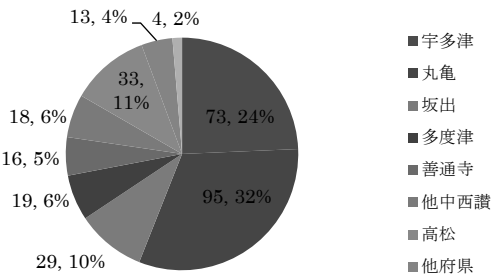


図13 回答者の住所

【出所】筆者作成

4. 全体の回答者の水族館の認知度については85%の認知度であった。市町村別の認知度については宇多津95%, 丸亀97%, 坂出97%と高く、遠方になるにつれて、低下している。

表7 水族館の認知度

【出所】筆者作成

認知度	人数	割合
知っていた	255人	85%
初めて知った	45人	15%

表6 回答者の性別と年代

【出所】筆者作成

性別年代別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	(空白)	総計
女性	13	21	88	47	14	22	8	1	214
男性	8	5	24	24	8	10	5		84
無回答		1						1	2
総計	21	27	112	71	22	32	13	1	300

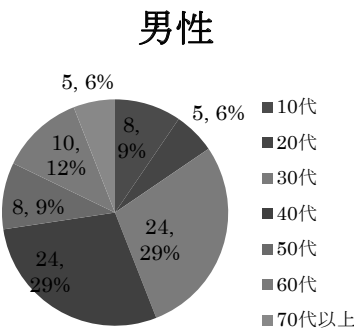
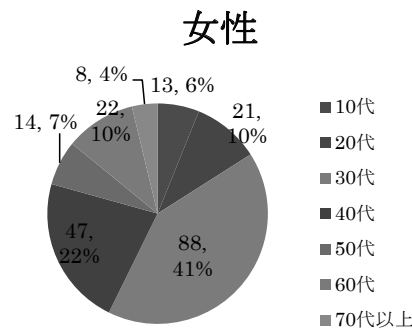


図11-12 市町村別年代別

【出所】筆者作成

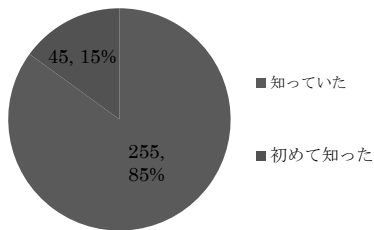


図14 水族館の認知度  
【出所】筆者作成

表8 市町村別の認知と  
【出所】筆者作成

	宇多津	丸亀	坂出	多度津	善通寺	他中西讃	高松	他府県
知っていた	95%	97%	97%	79%	75%	78%	61%	15%
知らなかった	5%	3%	3%	21%	25%	22%	39%	85%

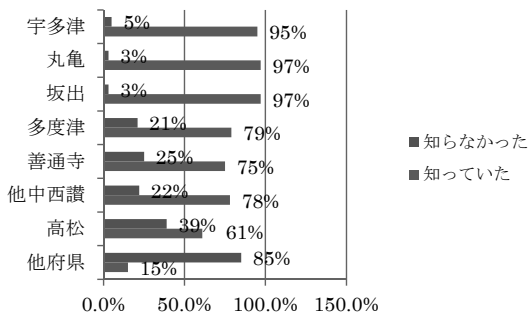


図15 市町村別の認知度  
【出所】筆者作成

5. 全体の回答者の水族館に対する歓迎の度合いについては大いに歓迎するが76.3%，どちらかといえば歓迎するが21.7%と合わせて98%が歓迎している。市町村別の歓迎度（大いに歓迎する+どちらかといえば歓迎する）でも宇多津100%，丸亀97%，坂出97%，多度津100%，善通寺100%，他中西讃100%，高松97%，他府県100%となっている。年代別の歓迎の度合いについては年代による大きな差は見られなかった。

表9 水族館に対する歓迎の度合い

【出所】筆者作成

	人数	割合
大いに歓迎する	229	76.3%
どちらかといえば歓迎する	65	21.7%
あまり歓迎しない	1	0.3%
全く歓迎しない	1	0.3%
わからない	4	1.3%

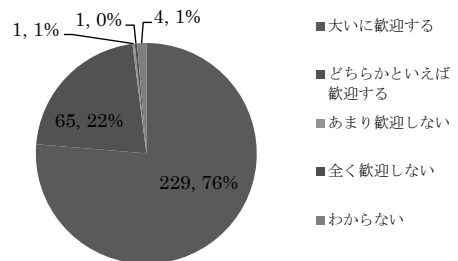


図16 水族館に対する歓迎の度合い

【出所】筆者作成

表10 年代別の歓迎の度合い

【出所】筆者作成

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	空白	総計
大いに歓迎	18	21	81	55	16	26	10	2	229
どちらかといえば歓迎	3	6	27	14	6	6	3		65
あまり歓迎しない				1					1
全く歓迎しない			1						1
わからない			3	1					4
総計	21	27	112	71	22	32	13	2	300

6. 宇多津町の観光の核になりうる資源については、水族館，うたづ臨海公園，ゴールドタワーで76%を占めており，新宇多津都市北部が核となりうる事が判明し，住所による特徴では，近隣の住民が秋祭りやお雛様といった町独自の行事を挙げていた。年代による大きな差は見られなかった。

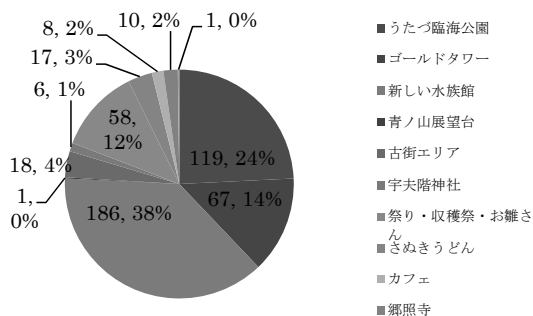


図17 宇多津町の観光の核になりうる資源  
【出所】筆者作成

表11 宇多津町の観光の核になりうる資源（市町村別）

【出所】筆者作成

	全体	宇多津	丸亀	坂出	多度津	善通寺	他中西讃	高松	他府県
うたづ臨海公園	119	25	37	18	6	7	8	11	6
ゴールドタワー	67	11	16	4	1	8	8	11	5
新しい水族館	186	43	63	22	10	8	10	25	5
青ノ山展望台	1	0	1	0	0	0	0	0	0
古街エリア	18	4	7	2	1	0	1	2	0
宇夫階神社	6	4	1	0	0	0	0	0	0
祭り・収穫祭・お雛さん	58	16	21	2	4	5	3	5	2
さぬきうどん	17	10	1	0	3	0	0	1	2
カフェ	8	1	2	2	0	0	1	1	0
郷照寺	10	4	5	0	0	1	0	0	0
常盤公園	1	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表12 宇多津町の観光の核になりうる資源（市町村別のゴールドタワー・臨海公園・水族館の割合の合計値）

【出所】筆者作成

全体	臨海公園＋ゴールドタワー＋水族館＝76%
宇多津	臨海公園＋ゴールドタワー＋水族館＝89%
丸亀	臨海公園＋ゴールドタワー＋水族館＝75%
坂出	臨海公園＋ゴールドタワー＋水族館＝88%
多度津	臨海公園＋ゴールドタワー＋水族館＝68%
善通寺	臨海公園＋ゴールドタワー＋水族館＝80%
他中西讃	臨海公園＋ゴールドタワー＋水族館＝79%
高松	臨海公園＋ゴールドタワー＋水族館＝84%
他府県	臨海公園＋ゴールドタワー＋水族館＝80%

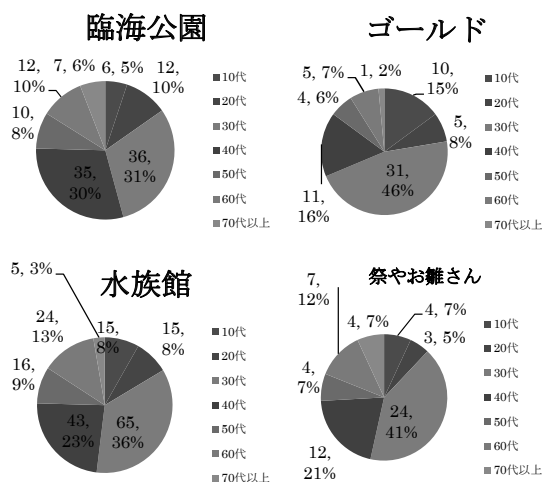


図18-21 宇多津町の観光の核になりうる資源（年代別）  
【出所】筆者作成

7. 町の振興に対して協力できることについては水族館関連のイベントの企画実行が96名（24%）、美化や花いっぱい活動と学校教育と連携した地域を知る活動が共に57名（14%）、イベントへの協力が59名（16%）であり水族館を中心とした協力が得られることが判明した。

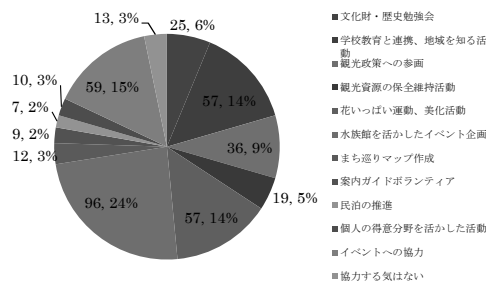


図22 町の振興に対して協力できること（全体）  
【出所】筆者作成

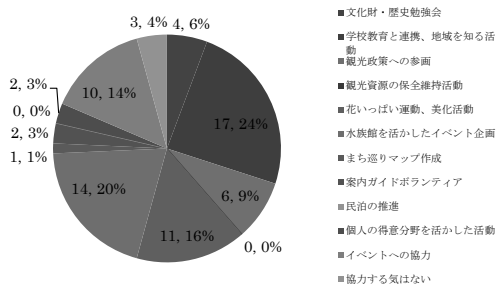


図23 町の振興に対して協力できること(宇多津)  
【出所】筆者作成

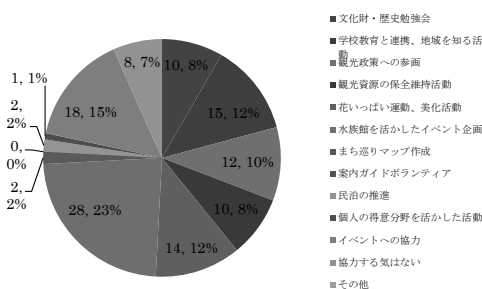


図24 町の振興に対して協力できること(丸亀)  
【出所】筆者作成

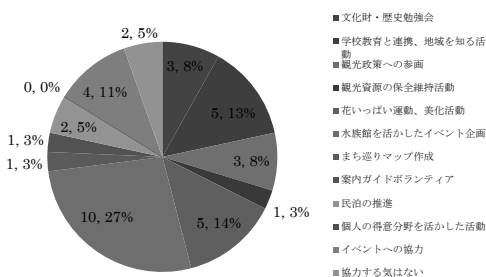


図25 町の振興に対して協力できること(坂出)  
【出所】筆者作成

#### 4-4 アンケートの総括

アンケート回答者のうち、男女別にみると女性が214名（72%）、男性が84名（28%）、年代構成は、子どもの母親世代の30代が88名（41%）40代が47名（22%）で60%を超えていた。ブースのイベントの特性上、子連れの参加者が多く、子どもは塗り絵、母親がアンケートという参加形態が多かったことが分かる。地域別参加者では丸亀市が95名（32%）、

宇多津町が73名（24%）、坂出市が29名（10%）と全体の66%を占めており、近隣からの参加者が多いことがわかるが、反面、高松市からの参加者も33名（11%）と坂出市よりも多いことも判明した。

認知度については、85%が知っていたと答えており、地域別認知度も宇多津（95%）、丸亀（97%）、坂出（97%）と高く、周辺になるにつれて認知度の低下が見られ、多度津町（79%）、善通寺市（75%）であった。特に他府県での認知度は15%と非常に低い現状であった。

今後は、県内のみならず瀬戸内圏をターゲットとしたプロモーション活動も必要であると考えられる。

水族館への歓迎の度合いは全体では、大いに歓迎するが76.3%、どちらかといえば歓迎するが21.7%と合わせると98%と非常に高い歓迎度であることが分かる。歓迎しないという選択は非常に少数で、あまり歓迎しないが1名（丸亀市・40代女性）、全く歓迎しないが1名（坂出市・30代女性）、わからないが4名であり、地域別の差はほとんど見られなかった。市町村別の歓迎度（大いに歓迎する＋どちらかといえば歓迎する）でも宇多津100%、丸亀97%、坂出97%、多度津100%、善通寺100%、他中西讃100%、高松97%、他府県100%となっている。

宇多津町の観光の「核」になると思う資源について、全体では宇多津臨海公園が119名（24%）、ゴールドタワーが67名（14%）、水族館が186名（38%）であり合計76%であった。地域別に臨海公園とゴールドタワー、水族館の数値の合計を比較しても、宇多津町89%、丸亀市75%、坂出市88%、善通寺市80%、高松市84%と市町村による差はなく、将来の観光の核となる資源は新宇多津都市北部（宇多津臨海公園・ゴールドタワー・水族館であり、旧宇多津町の古街や神社仏閣とはならないことが予想される。ただ、宇多津町のお祭りや、秋の収穫祭、お雛さん等の時期的なイベントを挙げている人も全体で58名（12%）おり、特に宇多津町16名、丸亀市21名と近隣の住民が重視していることが分かる。年代別にみると70代以外は水族館がトップであり、2位も臨海公園が多くを占めている（10代・70代以外）。

宇多津町の振興に対して協力できることについては、水族館関連のイベントの企画実行が96名

(24%), 美化や花いっぱい活動と学校教育と連携した地域を知る活動が共に57名(14%), イベントへの協力が59名(16%であった。年代別の協力できる事柄について20・30・40・50代が水族館のイベントが1位となり, 10・60代が花と美化活動, 70代が文化歴史勉強会が1位となっている。

水族館を核としたとしたまちづくりを考えるとという方向性はアンケート結果からも妥当性があることがわかった。想定するエリアについては宇多津町の臨海公園・ゴールドタワー・新水族館を中心とした新宇多津都市エリアで, そのエリア内で水族館中心のイベントや臨海公園等でのイベントの開催がまちづくりにつながっていく可能性があると考えられる。



図26 宇多津町全景図  
【出所】宇多津ライオンズクラブHP

## 第5章 考察と提言

### 5-1 考察

先行研究より, 水族館の集客の成功要因の一つとしてプレイベントが効果的であること, 水族館の公的機能としてレクリエーション・自然保護・教育・研究という四機能があり自然への共感を呼び起こす場としての意義と地域の核としての意義があること, 地域住民との連携のために活動団体の立ち上げ

や育成の重要性が明らかになっている。先行事例では日本福祉大学の子どもが発達に関する研究のための連携, 新江ノ島水族館の「えのすいECO」による住民参加型の環境教育活動の取り組みによる成功事例が明らかになっている。

ヒアリングより判ったことは, 1 団体の活動するエリアは中学校区くらいが良い, 2 団体に水族館もメンバーも加える, 3 団体は水族館を助ける立場, 4 団体は水族館ができた後の町の構成を支える必要性がある。団体が自治体のイベントを海星と共催できるようにすると良い, 5 団体は水族館の維持管理や周辺整備(動線)を行うことが良く, メンバーがあと3人(商工会・商工会青年部・ボランティア団体等)必要であり, 象徴的なパフォーマンスをすることも大切である, 6 環境保全活動の実施も視野に入れておくこと, 7 ボランティア団体の立ち位置を水族館と話し合い, 協働できるようにすることが重要である, ということである。

アンケートより分かったことは, 水族館は地域住民からは大変歓迎されており, 宇多津町のまちづくりの核となりうること, そのエリアは臨海公園やゴールドタワーも含めた新宇多津都市であること, 活動としては水族館を中心とした教育や地域の学習や美化の活動及びイベントへの協力への関心が高いことがわかった。

水族館の来場者の属性について神戸市立須磨水族園のアンケート調査より考察する。神戸市立須磨水族園が平成23年に実施した来場者へのアンケート調査結果(休日の11月27日, 平日の11月22日実施3,096名)において単独来場者は2%, 家族連れが84.5%, その他同伴が12.3%となっており, 中でも20歳以下の家族連れが63.4%と突出しており, 水族館への来場者の特徴といえる。筆者の団体がイベント時に実施したブース来場者もその多くが子ども連れの家族であり, 水族館への来場者の属性と一致することから, 来場者の属性は子ども連れの家族と推測できる。このことから, 水族館と臨海公園や, 水族館と新宇多津都市の資源との関係性を考えていく必要がある。

宇多津町の臨海公園・ゴールドタワー・新水族館を中心とした新宇多津都市エリアで, そのエリア内で水族館中心のイベントや臨海公園等でのイベント

の開催がまちづくりにつながっていく可能性があると考えられる。

## 5-2 提言

水族館を核とした持続的なまちづくりを実現するために、地域住民が水族館とどのように協働し、どのような活動を実践していくことが必要であるのかを提言する。

地域住民や水族館との連携のための団体の立ち上げの必要性については既に筆者自身が前出の団体“海星”を立ち上げ、イベント等での活動やミーティング等を実施しており今後も、四国水族開発や(株)ウエスコと連携しながら、水族館のある街の魅力づくりについての提案や事業の実施を行う予定である。

水族館の開館前イベントとして子どもワークショップ、プレバックヤードツアーを実施する。目的は、新しい水族館を広く住民に知らせること、新しい水族館への来場促進を図ること、円滑な運営管理をスタートさせるための機会とすること、関係団体との協働体制を構築することである。

その上に、地域住民へのプロモーションを行うことにより水族館が身近なものとなり、生物に対する学びの場となり、「飼育」という他の博物館にはないことが理解できる場となる。現在、(株)ウエスコは高知県大月町で地元漁協と協力して漁獲と飼育を目的とした基地の準備を進めており、そこでストックした魚類が宇多津の水族館に搬入されることになっている。水族館建設では、開館の一年半前に建設予定地内に水槽（ストックヤード）を設置して魚類を搬入して飼育を始めるのが通常のプロセスである。2019年3月（水族館開館1年前）に海星主催でシンポジウム「水族館とまちづくり」（国際ウミガメ学会会長奈良氏、むろと廃校水族館館長若月氏に交渉中）及びストックヤード見学会（プレバックヤードツアー）を実施する。ガイド役は“海星”メンバー、(株)ウエスコ・浜本、四国水族館開発関係者が行う。そのために(株)ウエスコの浜本氏よりメンバーに対して事前の研修会を実施する（第二土曜日ミーティング時）。

地域へのプロモーション活動予定は以下の表にまとめた。今後は、町内だけではなく近隣地区のイベント等に参加し気運を高める取り組みとする。

表13 今後（2018年度）のプロモーション

【出所】筆者作成

イベント名	イベント実施年月日	イベント内容
瀬戸大橋架橋30周年記念イベント	4月7日～8日 6月30日 7月21日 8月18日	子ども対象のワークショップ
宇多津秋の大収穫祭 須磨水族館共催イベントブース	11月3・4日	子ども対象の塗り絵、缶バッジタッチプール、360°バーチャル水族館体験等
子どもワークショップ（香川短期大学）	12月8日	子ども対象のワークショップ「うたづの住民になる生物について」
シンポジウム・プレバックヤードツアー（香川短期大学）	3月9日（予定）	四国内の水族館関係者のシンポジウム、プレバックヤードツアー

イベント開催のために昨年度は宇多津町まちづくりファンド助成金事業で「まちづくり始めの一步事業4万円」の補助を受けており、本年度は同助成金事業の「まちづくり一歩前事業」20万円の補助を受けている。香川短期大学との連携については本学地域交流センターの地域住民対象のカルチャー講座（平成29年度20回開催）があり、平成31年度、(株)ウエスコによる水族館講座の開催を計画している。特に子どもや高齢者の方々に受講の機会を設けて水族館への理解の場となるように進めていくこととする。また、来年度より香川短期大学水族館サポート学生ボランティア団体を結成（31年度4月入学生より募集する）し、海星が水族館との調整役となることで双方のニーズの実現が可能となる。

水族館への地域の来場者の多くは水族館から臨海公園、カフェという新宇多津都市の北部をめぐる可能性が高くカフェマップの作成等も今後の課題として提案できると考える。

## 5-3 本研究の貢献と限界

本研究では、水族館を核とした持続的なまちづくりを実現するために、地域住民が水族館とどのように協働し、どのような活動を実践していくことが必要であるのかを明らかにすることを目的としていた。その中で住民にアンケート調査を行い、既存の水族館関係団体代表者等にヒアリングし、自ら水族館と協働する団体を立ち上げていくことで水族館が新宇多津都市周辺の資源等と連動していくことがよ

り良いまちづくりにつながる事が判明した。また、住民の水族館への関心や歓迎度が非常に高いことも判明し、今後、新たな住民対象のイベント等を実施していくことで持続的なまちづくりに繋がる事が立証できた。

ただ、水族館自体が建設準備段階であり水族館自体の計画に未確定な部分もあることから、水族館の展示やイベント等を考慮した提言ができなかったことがこの研究の限界と考える。筆者自身は、職場の横にある水族館であるので常に水族館の建設の進捗状況を把握しながら、水族館のコンセプトや方向性を視野に入れて“海星”の団体として地域に密着した活動を継続していく決意である。

## 付 記

本文中の(株)ウエスコの水族館事業は2017年4月3日に水族館に特化した企画・運営事業を目的とした(株)ウエスコのグループ会社(株)アクアメント(神戸市)を設立し現在に受け継がれている。

## 注

- 1) 宇多津町に水族館を誘致する会代表北川博敏氏(香川短期大学名誉学長)へのインタビュー(平成29年7月6日13時～14時香川短期大学名誉学長室にて)
- 2) 2017年8月26日、10時から15時、須磨水族園内会議室にてヒアリングを実施した

## 参考文献

### 《文献》

- [1] 宇多津町まち・ひと・しごと創生本部(2015)「宇多津町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン」
- [2] 宇多津町に水族館を誘致する会代表北川氏へのインタビュー(2017年7月6日 13時～14時香川短期大学名誉学長室にて実施)
- [3] 海洋政策研究所(2015) ocean newsletter 第348号
- [4] 株式会社 四国水族館開発「四国水族館プロモーションビデオ」

- [4] 神戸市立須磨水族園アンケート結果(平成23年11月22日27日実施)
- [5] 神戸市立須磨水族園経営企画室浜本氏へのインタビュー(平成29年8月12日11時～12時 ユーブラザ宇多津2階会議室にて)
- [6] 児玉敏一(2016)「持続可能な動物園改革にむけて」札幌学院大学経営論集
- [7] 宇多津町誌編纂委員会(2010)『続宇多津町誌 うたづ』(2010), pp179-181
- [8] 田村明(1987)「まちづくりの発想」岩波新書 pp.52-53
- [9] 土居利光(2013)「都市環境における動物園および水族館の意義と役割」『観光科学研究』(6) pp.61-76
- [10] 鳥羽都子, 織田直文(2007)「まちづくりに関わる一主体としての文化施設に関する研究」『文化経済学』(5) pp.17-23
- [11] 日本経済新聞(2009年2月19日朝刊香川版31頁)
- [12] 農林水産省 平成27年市町村別農業産出額(推計)(農業センサス結果等を活用した町村別農業産出額の推計結果)2015
- [13] 毎日新聞(2016年1月21日朝刊地方版24頁)
- [14] 三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株)「自治体の中小企業支援の実態に関する調査」2013.11
- [15] 向井田善朗, 広田純一, 熊谷智義(2005)「博物館との地域づくりとの関わりの可能性」『農村計画学会誌』(24) pp.223-228
- [16] 安田亘弘(2012)「フードツーリズムと観光まちづくりの地域マーケティングによる考察」法政大学学術機関リポジトリ
- [17] 山浦綾香(2008)「海外交通事情 観光資源としてのミュージアム」『運輸と経済』68(3), 69-77
- [18] 山崎丈夫(2000)『まちづくり政策論入門』自治体研究社

### 《URL》

- [1] 宇多津町HP「宇多津町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン(平成27年10月)」  
<<http://town.utazu.kagawa.jp/2015/10/29/>>

2018年9月15日閲覧

- [2] 宇多津ライオンズクラブ  
＜[http://utazu-lions.org/?page\\_id=13](http://utazu-lions.org/?page_id=13)>2018年11月20日閲覧
- [3] 恋人の聖地プロジェクト「掲載記事（各地一覧）」  
＜[http://www.seichi.net/clipping/index\\_clipping.php/](http://www.seichi.net/clipping/index_clipping.php/)>2018年9月30日閲覧
- [4] 四国水族館開発「水族館事業に係る基本設計の進捗のお知らせ」  
＜<http://shikoku-aquarium.jp/>>2017年9月25日閲覧
- [5] 新江ノ島水族館「えのすいECO」  
＜<http://www.enosui.com/ecotop.php>>2018年10月3日閲覧
- [6] 神戸市立須磨水族園「調査研究・保全」  
＜<http://sumasui.jp/tyousa/investigation.html>>2017年10月1日閲覧
- [7] JAZA日本動物園水族館協会「加盟園館検索」  
＜[http://www.jaza.jp/z\\_map/z\\_seek00.html](http://www.jaza.jp/z_map/z_seek00.html)>2018年11月1日閲覧
- [8] 日本福祉大学 「おもちゃ王国と交流協定」  
＜<http://www.n-fukushi.ac.jp/site-search.html?q>>2017年10月17日閲覧
- [9] 農林水産省「2015年市町村別農業産出額（農業センサス結果等を活用した市町村別農業生産額の推計結果）」  
＜[http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/nougyou\\_sansyutu/](http://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/nougyou_sansyutu/)>2017年10月15日閲覧
- [10] 山形大学  
＜[https://www.yamagata-u.ac.jp/jp/information/eventcal/20160519\\_02/](https://www.yamagata-u.ac.jp/jp/information/eventcal/20160519_02/)>2018年10月18日閲覧

資料1 瀬戸大橋関連及び県内の商業観光関連の流れ

年月		県外観光客数
1987	四国ニュージールランド村 開園 バブル景気	490万人
1988	ゴールドタワー開館（ユニチャーム） （レストラン・高品位トイレ併設・タレントショップ） 瀬戸大橋タワー運用開始 京阪フィッシャーマンズ・ワーフ開業（与島） 瀬戸大橋開通・世界のガラス館開館	1035万人
1989		827万人
1990	レオマワールド開園	758万人
1991	平成不況	818万人
1992		795万人
1993		765万人
1994/ 3	宇多津ビブレ 開館（シネコン・ホテル）	706万人
1995	阪神淡路大震災	687万人
1996		719万人
1997		705万人
1998/ 9	ゆめタウン高松開店 明石海峡大橋開通	813万人
1999	しまなみ海道開通	771万人
2000	レオマワールド休園 日プラ屋島水族館経営	731万人
2001/ 3・9	USJ開園・ゴールドタワー閉鎖	728万人
2002	いざなみ景気	735万人
2003		776万人
2004/ 8	プレイパークゴールドタワー再開（味匠グループ） ニューレオマワールド開園（加ト吉・マルナカ・おもちゃ王国）	805万人
2005	愛知万博開催 四国ニュージールランド村 閉園	790万人
2006		799万人
2007/ 7	イオンモール高松開店	808万人
2008/ 7・12	綾川イオンモール・ゆめタウン丸亀開店 京阪フィッシャーマンズ・ワーフ閉鎖（与島） リーマンショック	814万人
2009	ETC休日特別割引制度開始 「日プラ、宇多津に新水族館」2月19日日本経済新聞	872万人
2010	瀬戸芸	881万人
2011	東日本大震災 ETC休日特別割引制度終了 うどん県それだけじゃない香川県キャンペーン実施	871万人
2012		889万人
2013	瀬戸芸	918万人
2014/ 2・11	宇多津ビブレ閉店・ 世界のガラス館 閉館（震災で系列店の営業不振及び来場者の減少）	906万人
2015/10	イオンタウン宇多津 開店	920万人
2016/ 6	四国水族館（仮称）基本計画発表 瀬戸芸	937万人
2017		
2018/ 6	水族館工事開始	
2019	瀬戸芸	
2020/ 3	水族館 オープン予定	

【出所】筆者作成（平成17年度版香川県の経済指標・財団法人かがわ産業支援財団・図表391 交通機関別県外観光客数の推移より）